

東海学園大学

図書館 だより

2012年 春号

(通巻88号)
《2012.4.1発行》

<http://www.tokaigakuen-u.ac.jp/lib/>

名古屋キャンパス図書館

〒468-8514 名古屋市天白区中平2-901
TEL (052) 801-1528 FAX (052) 804-1192

三好キャンパス図書館

〒470-0207 みよし市福谷町西ノ洞21-233
TEL (0561) 36-6755 FAX (0561) 33-0165

特集：林^{ハヤシ}霊^{レイ}法^{ホウ}先生を憶ふ

林霊法先生の教え

【田中祥雄】

日づけもすっかり忘れてしまったが、中部日本新聞(当時)であり、私が小学校の四、五年生ころであったことはたしかだ。私の母親は、その日の文化欄の記事を切り取り大切に取っていた。

「林霊法先生は東海中学の校長先生だ。先生が書かれた文章を見てみろ。濡れ衣で巣鴨拘置所にはいってもがんばった先生だ。」

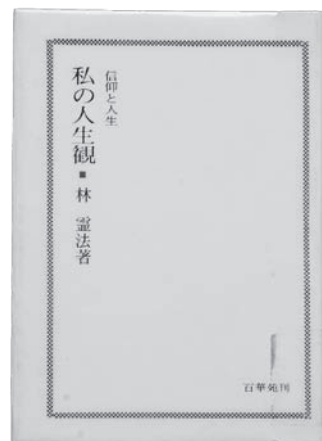
「お前と一緒にすることが一つある。脱腸だったことだ。」

この新聞記事は母が死んだときの遺物の整理時にもあったから、取り出しては読んでいたことに違いない。その内容はうろ覚えであったが、先生の青年時代の自伝であった。東海中学の林先生、という言葉は母親から何回聞いたことであろうか。私なりに「偉い先生」という概念がずっとあった。

母親の口癖はもう一つあった。悪さをする叱られる。その最初の言葉が、
「こんなことやっていると、荒井山の小僧にやっちゃうぞ。」

荒井山さんには申し訳ないが、三河地方の浄土宗寺院の子弟教育の合言葉は、この言葉ではなかったかと思う。それほど荒井山九品院での捨世修業は厳格で、大勢の子弟を養成されてきた。この一言で、よほどのことでも言うことを聞いたものである。この「林霊法」と「荒井山」、いつも聞かされて育った。

東海学園に奉職し椎尾弁匡先生や林霊法先生の著作とより親しくなり、この『私の人生観』(昭和五十二年六月刊)も読ませてもらった。そこには母親が口癖のようにいっていたことが、すべて書きつけてあった。読みながら私の年齢七十年の年月を行きつ戻りつの感動に私はかりたてられた。「宗教的ヒューマニズム」がテーマで、妹尾義郎に傾倒しつつ活動した青年期、我が学園において椎尾弁匡先生のもと青年教育に渾身の力を注いだ終戦後。その後の女子教育、とりわけ家庭教育にある「母親論」には随所に力が入る。それは教育者としての足跡であり、百山のご法主もされた心の軌跡でもある。学生諸君にいつも読むことを勧めている一冊である。



田中祥雄／東海学園大学学監

私の人生観：信仰と人生
百華苑 (188頁) ハ

いま、なぜ林靈法先生なのか！

東海学園大学が(前身の短期大学を含む)開学してからすでに半世紀近くになろうとしています。

早稲田に開学の祖、大隈重信あり！ 慶應に福澤諭吉あり！ 同志社に新島襄あり！ そして我が東海学園には実質上の創始者である林靈法先生がいました。若いみなさんにはすでになじみの薄い名前かもしれませんが、靈法先生の教育への理想と建学への精神が無ければ、今みなさんがこのキャンパスで学生生活と青春を謳歌することはなかったかも知れません。自分が学ぶ大学の教育の原点を知ることは、あなた自身の立地点と未来を知ることにつながるでしょう。強い精神力と大きな包容力、深い愛情をもって東海学園大学の教育の礎を築いた林靈法先生の若き日の苦悩と挫折、その波乱の半生と血の滲むような人間としての努力、高邁な教育理念と情熱の一端をここに特集します。

私学では創始者の教育への理想が輝きを失わず、いつの時代にも脈々と受け継がれていくところに特色があります。新学部もスタートし、大学も充実期を迎えた今こそ初心を省みることで、さらなる前進の発起点になればと願います。

今回は大正大学の星野英紀先生をはじめ、靈法先生の研究および思い出など、広く学内外の方々に寄稿をいただきました。みなさんが林靈法先生のことを知り、東海学園大学の学生としての誇りと愛情をもって、学生生活を有意義に送っていただけることを期待します。

林靈法先生の生きざま(寄稿)

【星野英紀】

私は、ここ数年、近代日本それも昭和期の仏教界リーダーたちに関心を持って勉強している。講義やその準備に追われて、思うように研究も進まないのであるが、太平洋戦争を境にまるで違う社会になった日本であるが、その激動期を生き抜いてきた仏教界指導者たちの生きざまは興味がつきない。

そのなかでも、林靈法先生はいま私がつも関心を持っている仏教者の一人である。なぜか。一口でいえば、林靈法先生の生涯は異彩を放っているからである。

戦前において、林先生は当時の日本国家のあり方について、仏教的観点から見て誤っているとして、敢然と国家に反旗を翻した。その結果、林先生は思想犯の一員として過酷な留置所生活を何年も強いられた。

戦後、縁あって東海学園に奉職し、宗教教育の大切さを痛感し、生涯を宗教教育の実践に打ち込まれた。晩年は浄土宗の名利である京都百万遍知恩寺のご住職となり、数多くの信者さんたちから高僧として大いに尊敬を集めた。

時代の大きなうねりと変化のなか、生涯を通して、社会に生きる信仰者として「もっとも大切なもの」を果敢にも追いつけた林先生には敬服の念で一杯である。

理想を持っている人はたくさんいる。しかし、その実現に向かって、数々の試練と挫折を乗り越えて歩み続ける人は少ない。林靈法先生は、そうした生き方を貫き通した希有の仏僧であったと思う。

過日、東海学園大学図書館の林靈法文庫をはじめて訪問させていただいた。何千冊という本を繙いてみると、たくさんの線引きや書き込みがなされている。先生ご精進の痕跡である。残念ながら、私は生前の林靈法先生を存じ上げない。しかしそれらの本を拝見していると、あたかも林靈法先生が眼前に現れてくるような思いにかられたのである。林先生の研究家にとって、東海学園大学図書館の林靈法文庫は欠かせない資料の宝庫である。勉強家であり努力家であり、なにもよりも社会実践を行う宗教家でありたいと願っていた林靈法先生がもし東日本大震災の被害に苦しむ現代日本に生きておられたら、どのような発言や活動をなされたであろうか。

星野英紀氏／真言宗豊山派 福蔵院(東京鷺宮)住職 平成16年大正大学学長就任 現在大正大学教授 文学博士
「四国遍路の宗教学的的研究」他 著書多数 林靈法先生の研究家でもある

林靈法先生の教育理念

【服部正穂】

林靈法先生の教育の根幹は宗教教育にある。ここでいう宗教教育とは一宗一派の狭義の教育をいうのではない。人間教育の基本をなすものとしての宗教教育である。

今日の教育は知的、科学的教育がその中心をなしているが、それだけでは人間教育はできない。人間教育にはまず人間そのものを理解し、それをより高次の存在へと育て上げていくことである。先生は科学的人間理解の限界について次の如く示される。

生きた人間を理解するのに、科学、社会学や学問だけでの知識で本当に出来るか。…科学的な方法論は分析的であり知的対象的な研究方法である。…しかし、科学的な対象的な把握の理解であるかぎり、そこに理解された人間は生きた血のかよった具体的な人間の行動、或いはこころの世界とは言い得ないだろう。(『法然浄土教と現代の精神的状況』)

「血の通った具体的な」人間の理解が大切である。人間を理解するため、先生は、現実生きる人間を三つのレベルから考察される。それは、生物学的次元、文化的次元、実存的・宗教的次元である。通常、人間は生物学的レベル乃至文化的レベルで生きることをもって、人間的生き方だとしている。しかしこれだけでは十分だとはいえないのである。そのことについて、豊かな社会におけるニヒリズムの問題についての先生の言葉を次にあげよう。

「豊かな社会ともなれば、生物学的次元での人間の生きることと実存的な人間の立場からした生きることの意味を問うことの区別がぼやけてしまうのである。生物学的次元での豊かな便利な生活になれて行くにつれて、人間存在の意味とか責任とかいうものが見失われ、無意味な日常生活のくり返しから、やがて退屈をまぎらわすためさまざまな遊びや刺激を追及して行くこととなる。しかし、人間はこの次元での欲望満足にはもともと落ち着ける存在ではないのである。そこに大きく口をあけて待つものは、こころの空しさであろう。不安とか絶望といった孤独の心情から生ずる神経症、或は自殺といった病理が生まれてくる。」(同上)

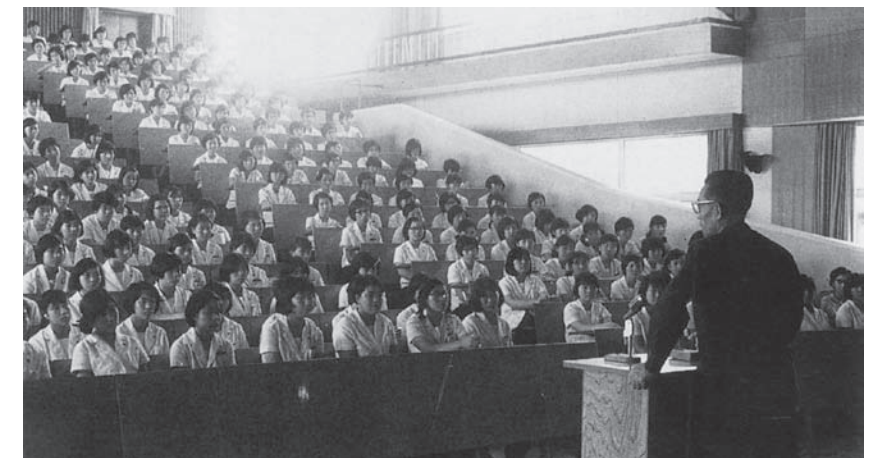
これが豊かな社会における一つのニヒリズムという状況である。こうした精神病理状況を克服するためには、「人間の生きる命の根源まで自己のすわりを掘り下げる」ことをしなければならない。そしてこの「自ら生きる命の根源にまで掘り下げるには、単に心理学、教育学、社会学といった科学的次元からの病理診断では不十分である。…実存としての人間存在の意味や価値をこれらは探求することは困難であって、ここに実存哲学や宗教の立場からの精神分析の必要が生まれてくる。」

かくのごとく、より豊かな人間の育成のためには、単なる科学教育のみではなく、人生の意味と価値を問う宗教的レベルでの教育が必要であると、先生は主張されるのである。

服部正穂氏／東海学園女子短期大学元教授・副学長 本学において宗教学の分野において卓越した教育を実践
日本仏教学会、日本宗教学会、東海印度学仏教学会等に所属 「法然浄土教思想」など著書多数 津島長福寺住職



林靈法先生



CS講堂で毎週林靈法校長の「教養」の授業が行われました。(昭和40年代のスナップ)

林靈法先生と東海学園の歴史

学園の沿革	年月〈年齢〉	林靈法先生年譜	典拠
浄土宗学愛知支校として認可	明治21年11月(1888年)		
開校	明治22年(1889年)		
	明治39年9月(1906年)	名古屋市大須に生まれる	年譜
	明治41年(1908年)〈3歳〉	母と共に寺に入る	大地235号
東海中学校に改称	明治42年9月(1909年)		
	大正2年(1913年)〈8歳〉	得度	大地235号
	大正13年3月(1924年)〈19歳〉	東海中学校卒業	
	昭和2年3月(1927年)〈22歳〉	第八高等学校文科卒業	
	昭和5年3月(1930年)〈25歳〉	東京帝国大学文学部哲学科卒業	
	昭和5年4月(1930年)〈25歳〉	大正大学に研究生として入学	
		研究室を出て名古屋に戻る 名古屋市内の細民街で伝道　一年ほどで上京	人生観
	昭和7年3月(1932年)〈27歳〉	大正大学にて検定試験を受ける	大地240号
	昭和7年4月(1932年)〈27歳〉	友松円諦師の仏教法制経済研究所主事	妹尾p22
	昭和7年11月(1932年)〈27歳〉	増上寺にて1ヶ月、道重信教大僧正の下で修道	
	昭和7年秋(1932年)〈27歳〉	仏教法制経済研究所を辞任、野依秀市氏の 仏教思想普及協会にて働く	大地234号
	昭和7年11月(1932年)〈27歳〉	新興仏教青年同盟入会	妹尾p24
	昭和8年1月(1933年)〈28歳〉	新興仏教青年同盟書記長兼中央執行委員	妹尾p31
	昭和10年1月(1935年)〈30歳〉	寿美と結婚	大地247号
	昭和12年5月(1937年)〈32歳〉	新興仏教青年同盟中央執行委員長	妹尾p136 ・同p45
	昭和12年10月(1937年)〈32歳〉	検拳される	出会いp69
	昭和13年3月(1938年)〈33歳〉	養林寺住職就任	夫人談
	昭和13年12月(1938年)〈33歳〉	保釈される	釈尊p70 大地250p1
	昭和20年(1945年)〈40歳〉	戦後東海中学で週の半分手伝う	大地163号
新制東海中学校開設	昭和22年4月(1947年)		
新制東海高等学校設置	昭和23年4月(1948年)〈43歳〉	明生保育園開設	釈尊p109
		東海高等学校主事	学園p302
	昭和25年2月(1950年)〈45歳〉	学校法人東海学園理事 東海高等学校校長(～昭和39年3月)	
	昭和26年4月(1951年)〈46歳〉	明生保育園から明生幼稚園へ	釈尊p109
	昭和31年11月(1956年)〈51歳〉	郭沫若中国副主席の要請により 愛知県教育文化宗教界代表として中国訪問	年譜
	昭和32年4月(1957年)〈52歳〉	愛知県私学協会副会長	年譜
	昭和33年4月(1958年)〈53歳〉	東海印度学仏教学会理事	年譜
	昭和37年2月(1962年)〈57歳〉	東海女子高等学校校長	
東海女子高等学校設置	昭和37年4月(1962年)		
東海学園女子短期大学　家政科・英語科開学	昭和39年4月(1964年)〈59歳〉	東海学園女子短期大学副学長(学長:椎尾弁匡先生)	
	昭和40年4月(1965年)〈60歳〉	東海印度学仏教学会会長	年譜
	昭和41年(1966年)〈61歳〉	東海学園「山の学寮」設置(三重県美杉村)	
	昭和41年11月(1966年)〈61歳〉	宗教セミナーのため東南アジア諸国歴訪	年譜

学園の沿革	年月〈年齢〉	林靈法先生年譜	典拠
	昭和43年4月(1968年)〈63歳〉	東海学園女子短期大学学長	
東海学園女子短期大学　国文科増設	昭和43年11月(1968年)		
	昭和43年6月(1968年)〈63歳〉	宗教事情視察と交換講演のためソ連及びヨーロッパ諸国歴訪	年譜 ・諸問題
	昭和44年12月(1969年)〈64歳〉	浄土宗大本山百万遍知恩寺第72世法主拝命	人生観
東海学園女子短期大学 家政学科・英文学科・国文学科に名称変更	昭和46年4月(1971年)		
	昭和46年(1971年)〈66歳〉	印度訪問、第3回訪印使節団	諸問題
	昭和51年(1976年)〈71歳〉	大本山百万遍知恩寺法主(第2期)	
	昭和53年(1978年)〈73歳〉	第1回百山インド仏跡巡拝団(浄土宗知恩寺仏跡巡拝団)	
	昭和54年(1979年)〈74歳〉	第2回百山インド仏跡巡拝団(浄土宗知恩寺仏跡巡拝団)	
	昭和55年(1980年)〈75歳〉	第3回百山インド仏跡巡拝団(浄土宗知恩寺仏跡巡拝団)	
	昭和56年(1981年)〈76歳〉	第4回百山インド仏跡巡拝団(浄土宗知恩寺仏跡巡拝団)	
	昭和56年7月(1981年)〈76歳〉	東海学園女子短期大学名誉学長	
	昭和57年(1982年)〈77歳〉	第5回百山インド仏跡巡拝団(浄土宗知恩寺仏跡巡拝団)	
	昭和58年(1983年)〈78歳〉	第6回百山インド仏跡巡拝団(浄土宗知恩寺仏跡巡拝団)	
		大本山百万遍知恩寺法主(第3期)	
	昭和59年(1984年)〈79歳〉	第7回百山インド仏跡巡拝団(浄土宗知恩寺仏跡巡拝団)	
	昭和60年(1985年)〈80歳〉	第8回百山インド仏跡巡拝団(浄土宗知恩寺仏跡巡拝団)	
	昭和61年(1986年)〈81歳〉	第9回百山インド仏跡巡拝団(浄土宗知恩寺仏跡巡拝団)	
	昭和62年6月19日～29日 (1987年)〈82歳〉	第10回インド仏跡巡拝記念として、 東欧の慰霊行と西欧の宗教事情視察	大地240号 付録
	昭和63年1月14日～26日 (1988年)〈83歳〉	第11回インド仏跡巡拝記念	大地247号
	昭和63年9月(1988年)〈83歳〉	脳梗塞	
	平成2年(1990年)〈85歳〉	大本山百万遍知恩寺法主(第4期)	
東海学園女子短期大学家政学科を生活学科に名称変更	平成3年4月(1991年)		
	平成6年4月(1994年)〈89歳〉	大本山百万遍知恩寺法主辞任	宗報H6. 8月号
東海学園大学　経営学部開学	平成7年4月(1995年)		
	平成8年9月(1996年)〈91歳〉	特別講演会「林靈法 ― その人と思想」開催 (於:名古屋市中社会教育センター視聴覚室。先生欠席)	
	平成12年3月(2000年)〈93歳〉	勝又病院にて遷化	
東海学園大学 大学院経営学研究科経営学専攻開学(三好キャンパス)	平成12年4月(2000年)		
東海学園大学人文学部開設(名古屋キャンパス)			
東海学園大学人文学部開設(名古屋キャンパス)			
東海学園女子短期大学国文学科・英文学科の学生募集停止			
東海女子高等学校が男女共学化により東海学園高等学校に校名変更			
東海学園女子短期大学を東海学園大学短期大学部に、 生活学科を生活環境学科に名称変更	平成13年4月(2001年)		
東海学園大学人間健康学部開設(名古屋キャンパス)	平成16年4月(2004年)		
東海学園大学短期大学部学生募集停止			
東海学園大学文学部に発達教育学科開設(名古屋キャンパス)	平成20年4月(2008年)		
東海学園大学 大学院中小企業診断士登録養成課程開設	平成21年4月(2009年)		
東海学園大学教育学部開設(名古屋キャンパス)	平成24年4月(2012年)		
東海学園大学スポーツ健康科学部開設(三好キャンパス)			

参考文献

出会い…仏との出会い(1967)
諸問題…法然浄土教と現代の諸問題(1971)
妹尾…妹尾義郎と新興仏教青年同盟(1976)
人生観…私の人生観―信仰と人生(1977)
学園…東海学園創立九十周年史(1978)
釈尊…釈尊出現の意義と浄土教(1981)
大地…大地
年譜…特別講演会「林靈法―その人と思想」資料

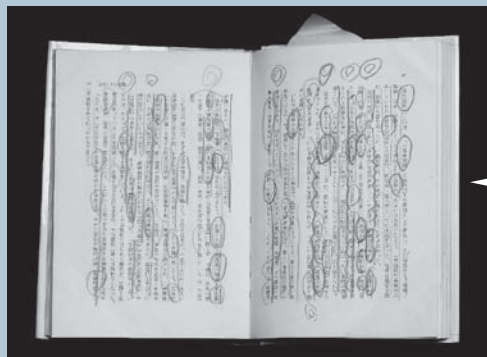
(林靈法先生の年譜は、服部正穂先生のご協力のもと作成しました)

林靈法文庫



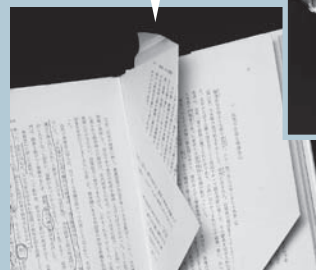
1997年に林先生より直接ご寄贈いただいた約4,000冊を元に開設されました。さらに先生がお亡くなりになった後、奥様からいただいた約1,000冊を加えて現在の形になっております。昨年末、新たに2,000冊ご寄贈いただきまして、ますます充実した文庫となりました。

その膨大な蔵書を眺めるだけでも圧巻ですが、いただいたどの本にもたくさんの直筆での書き込みがあり、ご著書と共にそれらをたどることで、先生が何に関心を持たれ、どう考えていらったのかを知る一端ともなる貴重な文庫です。



気になるページの端を折ることは誰でもあると思いますが、先生の折り方は大胆です！

白黒写真なのでわかりにくいと思いますが、赤鉛筆の上からさらに青ボールペンで書き込まれています。



この折り方だと閉じた時にそのまま葉になるのです。



「林靈法文庫」に東海学園の教育原点を学ぶ

【大矢佳之】

近年、小学校から大学にいたるまで「キャリア教育」の実施が求められている。では、いま求められているキャリア教育とはどのようなもので、それをどのように形成していくかが問われなければならないであろう。そして、わが学園にあってこれを自問するならば、まず、それは椎尾弁匡先生や林靈法先生が教えられるところに学ぶべきであると思う。

わたくしが林靈法先生の名前を知ったのは、大学開学時、三好キャンパスの3号館南沿いの植込みに一際背の高いヒマラヤスギが植えられていて、そこに添えられた木柱に「百万遍知恩寺法主 林靈法台下」と記されていたことによる。しかし、その後、そのヒマラヤスギは枯れてしまい、いつしか場所が4号館の北東隅に移され、2代目の記念樹としてアラカシの木が植えられている。その間に、林靈法先生は東海学園女子短期大学の創立者であること、また名古屋キャンパス図書館に「林靈法文庫」があることを知った。ところが、わたくしはその記念樹を時折見に行く程度で、十数年を無駄に過ごし、ついに今年度で定年退職の時がきてしまっていた。

そのようなわたくしに、ふと、林靈法先生のことを知っておかなければという思いが湧いて、名古屋キャンパス図書館の「林靈法文庫」に通いつめ、靈法先生の著論をかたっぱしから読みふける時間をもつとともに、東海学園の教育原理と教育プランのあざやかな姿に触れることができたのである。それは、東海学園に学ばせていただいて、唯一からだの奥底からよろこびを感じることができた日々であった。

さて、いま「キャリア教育」に求められているものは、専門的知識や職業的技能に関する授業科目をやたらに並べ立てることではなく、「人間にとって大切な人生をいかに生きるかという実践的原理である世界観、人生観を与える教育」(林靈法先生のことば)であると捉えるべきであろう。そして、さらに肝心な点は、そのような人間形成の教育が成り立つためには、教育者自身がつねに自らを教育することが求められているということである。ここに「教研相即」の真意があり、それはキャリア教育を支える背骨である。

大矢佳之／東海学園大学非常勤講師

たのむよ

【三輪理恵子】

1997年の2月、林靈法先生のお宅から連絡をいただき、引っ越し業者と共に約4000冊の先生の著作及び蔵書類を受取に養林寺まで伺いました。その頃はお体は多少不自由でしたが、まだ先生もお元気でいらっしゃいましたので、茶系の作務衣の上下を召され、椅子に腰をかけ両手を杖の上に重ねて私たち図書館職員をむかえて下さったことを昨日のことに思い出します。奥様のお話によると何日も何日もかけて手ずから本を整理されてひもで括られたとのことでした。

その膨大な資料を先生は1冊1冊ページをくりながらどんな感慨にふけていられたのでしょうか。先生が93年間の全人生をかけて学び、研究された集大成との別離です。きっと様々な思いが先生の記憶を駆け巡ったことでしょう。先生にとっては何ものにも代えがたい分身のような貴重な資料の数々です。一つ一つ表紙をなでるようにして括られていらっしゃる御様子が浮かびます。最後の数冊を手渡しで下さる時、私の目を見て「たのむよ」とおっしゃいました。

車の中から振り返りますと、奥様と御一緒に見送って下さっている靈法先生が両手を合わせていらっしゃいました。

2000年3月、先生の臨終の知らせを聞き、急いで病院へ駆けつけました。

先生は苦しい息の中でしたが、涙で呼びかける私に「おっ」というような表情をされて、かすかにうなずいて下さいました。そのとき私は「たのむよ」という先生の声ならぬ声を再び聞いたのだと今も確信しています。亡くられる最後まで先生の心は東海学園に在りました。実質、創始者としての責任と東海学園の教育の将来をかたときも思わない日々は無かったと思われます。「たのむよ」は東海学園の関係者の学生、教職員、卒業生の一人一人に向けて発せられた言葉に違いありません。先生の蔵書はその後も御遺族の意向で何回かにわたり寄贈を受け、図書館では先生の御意志を大切に受け継ぎ「林靈法文庫」として約7千冊の蔵書と他資料が大切に保存してあり、研究者や学生達の利用に供されています。

先生の貴重な蔵書類の大半には、びっしりと手書きの書き込みの跡があります。その内容は多岐にわたりますが、真冬の滝に打たれる修行僧のごとく、完膚無きまでの覚悟と信念で学問を追及する先生の姿が浮かび上がります。

ここに林靈法先生の教育理念の基盤の集積があり、東海学園の教育の原点と未来への指針があります。林靈法文庫は、創始者の理想から大きくぶれることなく、学園がさらなる発展をし続けて行くための、東海学園大学のパワースポットなのです。東学生を自負してやまない皆さんも、学生生活の中でふと我を見失うような不安に駆られる時もきっとあるでしょう。そんなときには林靈法文庫の中の先生に会いに来てください。若い学生達が大好きだった先生が「ほう、よう来たなあ。」と目を細めて迎えてくださることでしょう。そしてあなたが文庫を出るときには「たのむよ」という声が背中に聞こえるはずですよ。

三輪理恵子／東海学園大学図書館司書



昭和二十六年東海高校三年の或る日、養林寺で靈法先生と向き合って坐っていた時、何分か過ぎて先生が「君何か喋らんか」。 とっさに隣の奥様がとりなしてくださった。「時々授業を忘れて図書館で本を読んでいます。」和綴じの与謝野晶子の源氏物語訳を読んでいる時でした。「君もか」と先生は笑って言われました。こんなことが許された、勝手なことを言えば大らか、東海の懐の深さなのか、帰りにトルストイの「復活」を読むようにと貸してくださいました。

「諸君!」先生の呼びかけは、校長として先輩としての慈愛溢れる励ましとして生徒達の心に響きました。生徒は勉強生徒会、クラブにふるい立ち大いに青春を謳歌していました。

受験が迫った時「君はどの大学を受けるか」「早稲田と同志社です」「うん、早稲田へ行きなさい」 年が明け入試が済んだある日、小使いさんに借りた自転車で裏門から帰って来ると運動場で先生に会いました。「同志社へ行きます」「どうしてだ」と、合格して創立者新島襄、ついでに大隈重信、福沢諭吉三人の伝記を古書店で買い読んだところ新島襄の生涯に心から感動したことを話しました。先生は「そうか、それなら同志社へ行きなさい。私は以前から新島先生を尊敬申し上げている」と。

卒業式の校長式辞は感動的でした。式が終わって先生は握手して卒業生を送り出される。「君はいつ京都へ行く」「はい、明日行きます」「そうか、しっかり勉強して帰って来なさい」

私は涙が溢れました。

昭和三十七年一月の寒い日、公立中学校の昼休みの職員室、先生から電話があり、「女子高校を開校する、手伝いに来てくれ」「はい」こうして同年四月東海女子高等学校の教壇に立つことになりました。

「人生の青年期で最も大切な時期は高校時代である。その時に他ではありえない特別な教育があるはずである。」人間として最も大切なこと、法輪、慈悲と知恵、わかり易く「愛と寛容の精神」を掲げ林靈法校長は全力を尽くして教育の先頭を進まれ、教職員も続きました。本当に毎日一生懸命でした。

女生徒たちは躍動してまさに「学んで前進する」幸せな時でした。

高校時代という人生における特別な時期に、人間として最も大切なことを学んだ東海女子高等学校の卒業生は今こそ日本にとって大切な人なのです。

小出正和氏／東海高校4回卒業生。在学中校長であった林靈法先生の薫陶を受ける。 昭和36年林靈法先生の意を受け、公立中学を辞して東海女子高等学校の教員として、初代校長林靈法先生教育理想を掲げ、創立期から長きにわたり平針台の女子教育の発展に貢献。 元東海女子高等学校教頭 平成16年まで東海学園大学人文学部非常勤講師 茶道慈照庵家元



創立当初の職員(昭和37年) 林先生:前列右から4人目・小出先生:後列左から3人目

東海学園高等学校の前身である東海女子高等学校が平針の地に産声を上げて50年という年月が過ぎました。50年前の入学時に見た、赤土をむき出しにして荒涼と広がっていた丘陵地は、今では何ひとつその証を残してはいません。その赤土の一端にマッチ箱を縦にしたような校舎一つのスタートは、一般的にいう教育環境としては不十分この上ないものだったに違いありません。しかしそこに学んだ私にとってそういう物理的環境が何かマイナスであったかという、それは全く見当違いのことと言わねばなりません。私たちはあり余る教育的情熱——愛と寛容の精神——の中で自由奔放に羽根を伸ばしつつ学んだのです。頭でっかちで生意気だったに違いない私たちの訴えや愚痴を聞いて下さる時に、口元に少し皺を寄せて微笑んでいらった林靈法先生の面影は忘れることはできません。今思えばそれは慈愛に満ちた笑顔でした。私たちは、林靈法先生を頂点とする諸先生方の慈愛の世界で三年間育てられたといっても過言ではないと思われます。

私には忘れられない一つの象徴的な出来事がありました。

三年のいつ頃のことだったのでしょうか、私たち数名は、他県の田園地帯を突っ切る単線に乗って級友の家をめざしました。もう何日も学校を休んでいた級友は不在で、彼女の弟か誰だったか今では思い出せませんが、そこで働いていると教えられた店に行きやと会えたのです。親の突然の事情で働かなくてはならなくなった由。机を並べていたいつもと変わらない表情の中に何やら寂しげな様子も見てとれました。その時どれ程の励ましや慰めの言葉がかけられたのかどうか、今では遠い記憶の断片でしかありません。ただ、何故このことが忘れられないものとなっているかといえば、それは、私たちが出向いたことがゆゆしき行為として二、三の先生方から批判され、面と向かっても注意を受けたからです。授業を休んでまで行くに値しないということだったのででしょうか。担任の先生の指示のもと励ましに行ったことで、私たちにはそれなりの達成感や満足感がありましたから、他の先生から非難されるとは思ってもみませんでした。私自身とても複雑な心境でした。

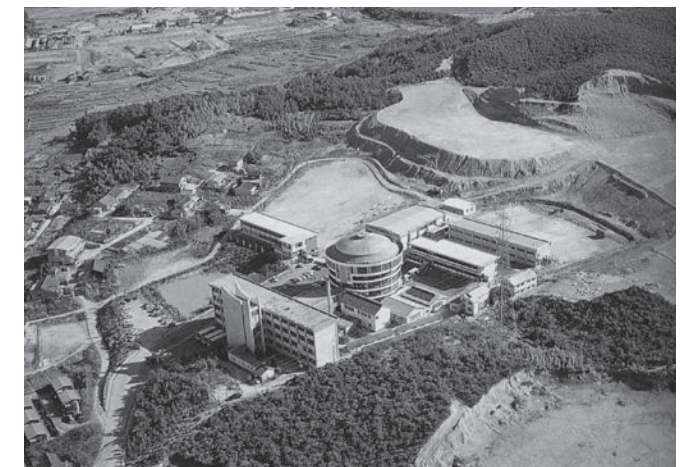
その心のしこり、胸中の暗雲がきれいに拭い去られたのは全校生徒の集う朝礼の時でした。校長先生が、私たちが級友の元にまで出向いたということを話に取り上げ、それは実に尊い行いであるとほめて下さったのです。あよかった、私たちは悪いことをしたのではなかった、というのが最初に思ったことです。そして何ともいえぬ静かな喜びが心の内に満ちてきたのを今でも鮮明に思い起こすことができます。

この出来事を他の人がどのように受け止めていたのかはわかりませんが、自信を持って行動しなさいと後押しされる強い励ましに思えました。またこの励ましを通して慈しみの心の大切さをさし示して下さいに違いありません。そして何よりもこれを契機にして、林靈法先生との目には見えないけれど堅固なつながりが心の中に生まれた、そんな貴重な出来事だったと思えるのです。

田中つやの氏／東海女子高等学校1回卒業生 元東海女子高等学校同窓会会長 元東海女子高等学校国語教員



昭和39年当時の校舎



昭和40年当時の名古屋キャンパス

図書館所蔵 林靈法先生著作リスト（大矢佳之先生のご協力のもと作成しました）

書籍（出版年順）

書名	出版社	出版日付	請求記号
新世紀の使命と社会的宗教（新興佛教叢書:第5輯）	佛旗社	1933.10	180 Ⅱ H
危機における社会宗教の信仰（新興佛教叢書:第6輯）	佛旗社	1934.11	160 Ⅱ H
法然上人の生涯と信仰　　『法然上人を憶ふ』の原本	浄土宗宗務所	1943.4	未所蔵
法然上人を憶ふ	養林精舎	1943.4	188.6 Ⅱ H-1
若き世代への闘い	東海學国出版部	1952.9	159 Ⅱ H
新中国紀行：若い中国のモラル	東海学国出版部	1957.6	292 Ⅱ H-2
危機と信仰：新しき日のために	百華苑	1958.9	184 Ⅱ H
現代思想と仏教の立場	百華苑	1962.2	180 Ⅱ H
わが復活の曙光：信仰と人生	百華苑	1963	180 Ⅱ H
高校生活の探求：教育と人間について	東海学国出版部	1966.10	377 Ⅱ H
仏との出会い：林靈法集（昭和仏教全集:第4部 2）	教育新潮社	1967.12	184 Ⅱ H
キリスト教と仏教の対話：ソ連・ヨーロッパを廻りて（あそか新書:3）	あそか出版社	1969.2	161.9 Ⅱ H
現代を開眼する法然浄土教	東海学園女子短大出版局	1969.11	188.6 Ⅱ H
大いなる邂逅	知恩寺	1970.3	188.6 Ⅱ H
若き日の信仰：法然上人の信仰に生きる（百萬遍シリーズ:第五集）	知恩寺	1970.4	188.6 Ⅱ H
生きる喜び：浄土三部経のお話（護持会シリーズ:3）	大本山百万遍知恩寺護持会本部	1970.11	188.6 Ⅱ ハ
インド仏蹟巡拝の感激：四大聖地での釈尊との出会い（百萬遍シリーズ:第6集）	大本山知恩寺	1971.4	182.9 Ⅱ H
法然浄土教と現代の諸問題	百華苑	1971.7	188.6 Ⅱ H
椎尾辨匡先生追悼録	東海学園仏教青年会	1971.12	289.1 Ⅱ H
法然人生論（現代人生論法話）	雄渾社	1972.4	188 Ⅱ ハ
「一枚起請文」の心と法然上人（護持会シリーズ:5）	大本山百万遍知恩寺護持会本部	1973.7	188.62 Ⅱ H
ひらけゆく選択の祖道：現代の精神的危機と法然上人信仰	浄土宗宗務庁	1974.1	188.6 Ⅱ H
日本の教育はどこへ行く：幼児教育二十六年をかえりみて	明生学園	1974.3	376.1 Ⅱ H
妹尾義郎と新興佛教青年同盟：社会主義と佛教の立場	百華苑	1976.2	184 Ⅱ H
日本の教育はどこへ行く：幼児教育における宗教情操	明生学園	1976.4	376.1 Ⅱ ハ
私の人生観：信仰と人生	百華苑	1977.6	188 Ⅱ ハ
絶望と希望	百華苑	1979.11	188.64 Ⅱ ハ
五重講説	一心寺	1980.11	188.6 Ⅱ H
釈尊出現の意義と浄土教：私の歩いた求道の遍歴（浄土選書:9）	浄土宗宗務庁	1981.3	188.6 Ⅱ H
信仰復興	百華苑	1982.11	188.6 Ⅱ ハ
法然浄土教と現代の精神的状況	百華苑	1985.10	188.6 Ⅱ H
インド仏跡思索行	百華苑	1987.3	180.29 Ⅱ H
椎尾弁匡先生と共生浄土教	百華苑	1988.8	188.6 Ⅱ H

冊子（脱稿年・出版年順）

書名	出版社	出版日付	備考
若き革命家における理想主義：マルクス・レーニン・毛沢東	[不明]	1959.2	
道德教育と宗教（昭和34年2月21日講演）	豊橋教育懇談会	1959.2	豊橋教育懇談会シリーズ第3輯
終末の現代に対決する法然の末法史観：浄土開宗八百年の歴史的意義	[不明]	1974.2	
真人運動のしおり	日本仏教文化協会	1968.4	真人運動の綱領解説p.10-13
社会福祉をささえる仏教精神（第三回社会福祉指導員研修会講演）	天台宗社会部	1970.1	
現代人は何によって救われるか：人間の生きる根拠と責任を問う（講演）	[不明]	1977.11	コピー
いのちを考える：人間をつくる乳幼児保育：法然さまお誕生八五〇年記念	浄土宗保育協会	1983.3	

原稿			
タイトル	出版社	出版日付	備考
涙痕記（原稿用紙721枚。うち約200枚分は「仏との出会い」に収録）		1940.10	未所蔵

論文・雑誌記事（掲載誌五十音順）

タイトル	出版社	出版日付	掲載誌名
現代の精神的危機と仏教：ニヒリズムの亀裂を克服するもの	日本仏教文化協会	1966.11	あそか　第69号p.56-65
母なるガンジスと長き旅路を：ガンダーもネルーも、またカマラさんも　第1回	日本仏教文化協会	1971.4	あそか　第112号p.38-43
新大乘仏教運動とマルクス主義：仏教復興講座2	日本仏教文化協会	1971.8	あそか　第115号p.15-31
毛沢東思想は人間を造りかえる　（中）	日本仏教文化協会	1973.1	あそか　第131号p.52-58
稲垣真我先生と戦時の教育	稲垣真我先生遺文・追悼文集刊行会	1990.5	（書籍）稲垣真我先生遺文・追悼文集p.464-467

論文・雑誌記事（掲載誌五十音順）

タイトル	出版社	出版日付	掲載誌名
宗教教育と大学入試について：高校教育の矛盾とその克服への努力	東海高校生徒会	1961.9	杏葉　第3号p.43-51
教育と宗教：宗教教育の意義と私学の使命	東海高等学校教育文化研究所	1964.3	研究紀要　第3集p.1-26
大乘佛教と基督教	現代佛教社	1935.8	現代佛教　第125号p.38-45
女性興法：仏教と性と結婚	教育新潮社	1968.12	宗教　第6巻第12号p.14-19
浄土に国籍を有する念仏者よ、現代を批判せよ（頌春　七大本山法主年頭所感）	浄土宗東京事務所	1988.1	宗報：浄土宗　No817(改.No281)p.5
人生のゆくえ：秋の彼岸に思う	法然上人鑽仰会	1960.9	浄土　第26巻第9号p.2-5
極楽があるから生きてゆける	法然上人鑽仰会	1963.8	浄土　第29巻第8号p.4-6
生命の殿堂に明かりを点せよ	法然上人鑽仰会	1977.1	浄土　第43巻第1号p.7-9
今年も暁の明星を仰ぐ	法然上人鑽仰会	1980.1	浄土　第46第8号p.6-9
賜りたる命：法然上人のご生誕に学ぶ	法然上人鑽仰会	1981.1	浄土　第47巻第1号p.2-7
水子地蔵に涙を流す日本の婦人：法然上人ご生誕八五〇年に思う	法然上人鑽仰会	1982.1	浄土　第48巻第1号p.2-6
前進座の「法然」を観る	法然上人鑽仰会	1983.1	浄土　第49巻第1号p.11-15
真理大道の実現としての共生浄土教：椎尾弁匡上人の念仏体験の背景	百華苑	1979.1	（書籍）浄土教における宗教体験（藤吉慈海編）p.29-79
法然上人の宗教的人格とその周辺	仏教大学	1972.3	（書籍）浄土教の思想と文化：恵谷先生古稀記念p.289-307
現代における法然浄土教の意義	知恩院浄土宗学研究所	1967.3	浄土宗学研究　第1号（1966年度）p.25-68
近代における佛教の社会的開眼とマルクス主義	知恩院浄土宗学研究所	1968.3	浄土宗学研究　第2号（1967年度）p.333-398
現代の精神的危機と浄土教の課題	知恩院浄土宗学研究所	1969.3	浄土宗学研究　第3号（1968年度）p.93-121
佛教とマルクス主義：共産主義はニヒリズムを克服しうるか	知恩院浄土宗学研究所	1970.3	浄土宗学研究　第4号（1969年度）p.25-62
（書評）法然浄土教の現代的理解：藤吉慈海著「浄土教思想研究」をめぐり	知恩院浄土宗学研究所	1970.3	浄土宗学研究　第4号（1969年度）p.319-328
椎尾弁匡上人の共生浄土教	知恩院浄土宗学研究所	1978.3	浄土宗学研究　第10号（1977年度）p.47-85
文明への反逆	佛旗社	1933.2	新興佛教　第14巻第2号p.30-32
宗教復興の時代	佛旗社	1933.3	新興佛教　第14巻第3号p.22-27
社会的危機と宗教改革	佛旗社	1933.4	新興佛教　第14巻第4号p.7-11
全国講演行脚記	佛旗社	1933.5	新興佛教　第14巻第5号p.18-21
全聯の欺瞞性と青年佛教徒の道	佛旗社	1933.5	新興佛教　第14巻第6号p.10-15
生きることの痛みとゆるし	信道会館	1984.2	信道　第40巻第2号p.2-17
生きることの痛みとゆるし（前承）	信道会館	1984.3	信道　第40巻第3号p.8-18
真理五十年の御指導に感謝	真理舎	1984.12	真理　第50巻第12号
現代の精神的危機：ニヒリズムの亀裂を克服するもの	東海高等学校社会研究部	1963.3	世紀　第13号p.4-11
現代青年論	東海高等学校社会研究部	1964.2	世紀　第14号p.22-27
泰平ムードの中の青年像	東海高校・東海女子高校社会研究部	1965.3	世紀　第15号p.87-91
父の慈訓を思う	総本山知恩院	1977.6	知恩　第358号p.2-7
伊勢湾台風と東海高校生：友情と誠意に生きた奉仕隊	東海高等学校	1959.12	月影　第1号p.18-28
さまよえる日本の知識人：信州アルプスの麓なる友へ	東海高等学校芸芸部	1956.1	東海　第6号p.6-25
中国は起ちあがる：平和使節の日記抄	東海高等学校芸芸部	1957.2	東海　第7号p.2-31
ニツエの現代的意義と宗教	東海高等学校芸芸部	1960.1	東海　第8号（復刊第1号）p.43-49
現代の世界観と宗教：ニヒリズムの解明とその克服	東海学園女子短期大学生生活科学研究所	1965.4	東海学園女子短期大学研究紀要　創刊号p.7-45
法然の浄土教成立の背景：平安期末における僧界を中心として	東海学園女子短期大学生生活科学研究所	1966.5	東海学園女子短期大学研究紀要　第2号p.35-56
黒谷における情念の回心について：法然浄土教成立の源頭	東海学園女子短期大学生生活科学研究所	1968.7	東海学園女子短期大学研究紀要　第5号p.5-24
法然浄土教における女性の地位	東海学園女子短期大学生生活科学研究所	1969.8	東海学園女子短期大学研究紀要　第6号p.1-32
史的唯物論の限界と仏教	東海印度仏教会	1960.3	東海仏教　第6輯p.55-71
浄土教より観た故郷喪失の日本人：死の意味を忘れた生の文明のゆくえ	東海印度仏教会	1985.6	東海仏教　第30輯p.13-42
社会主義国における信教の自由とその思想的背景	井川博士喜寿記念会	1974.11	（書籍）日本文化と浄土教論攷p.952-973
仏教の実践の根拠となる世界観：現代社会の病理とその克服の道	佛教大学佛教社会事業研究所	1976.11	佛教福祉　第3号p.4-27
青少年の自殺と宗教教育：なぜ生きねばならぬのか	佛教大学佛教社会事業研究所	1979.11	佛教福祉　第6号p.4-39
現代人の病理と精神衛生：精神医学と仏教の接点	佛教大学佛教社会事業研究所	1983.1	佛教福祉　第9号p.1-25
現代における福祉問題の焦点：社会福祉に対する根本的な疑問	佛教大学佛教社会事業研究所	1985.3	佛教福祉　第11号p.1-25
科学技術の文明と宗教	東海学園女子短期大学学部会	1970.3	緑苑　第5号p.20-24
近代日本人の恋愛観の変遷	東海学園女子短期大学学部会	1972.3	緑苑　第7号p.4-13
青春の中の愛と死（大学祭記念講演）	東海学園女子短期大学学部会	1974.3	緑苑　第9号p.5-13
わが命地球より重し	東海学園女子短期大学学部会	1979.3	緑苑　第14号p.9-16
人生の遍歴と人間の教育	東海学園女子短期大学学部会	1981.3	緑苑　第16号p.4-12
それでもゆるされて生きる	東海学園女子短期大学学部会	1982.3	緑苑　第17号p.4-8

その他

誌名	出版社	出版日付	備考
大地		第1号～第250号 1956.9～1988.7	欠号あり

林靈法先生を知るための3冊

『仏陀を背負いて街頭へ——妹尾義郎と新興仏教青年同盟——』

稲垣真美著 岩波書店(岩波新書青版892)



先生が戦前に活動された新興仏教青年同盟について、発足から弾圧そして戦後へと時代に沿ってわかりやすく書いてあります。先生もご著書『私の人生観』や『わが復活の曙光』また『椎尾弁匡先生と共生浄土教』などの中に繰り返し同盟への加盟のいきさつや弾圧を受け投獄された時のことを書いていらっしゃいますので、それらと合わせて読むと、より当時の先生のことを知ることができると思います。

もちろん同盟において重要な役割を果たされた先生のことは、文中にたくさん描かれていますが、それとは別に著者のお父様が東海中学校第7代校長稲垣真我先生ということで、まえがきで靈法先生が学園に赴任された時のことにも少し触れられています。

『ともいきの教え永遠に——東海学園百二十年の歩み——』

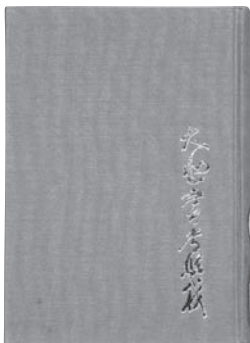
和木康光著 中部経済新聞社



平成20年1月4日から同年6月30日まで中部経済新聞に連載されたもので、その名の通り東海学園が浄土宗の愛知支校から始まり現在にいたるまでが一冊にまとめられています。前半が東海中学校・東海高等学校の誕生と発展、後半が東海女子高校・東海学園女子短期大学設立から東海学園高等学校・東海学園大学へ…という内容なのですが、ほとんど前半は椎尾弁匡先生、後半は林靈法先生のエピソードと言っても過言ではなく、このお二人の先生方なくして現在の東海学園はありえないということがありありとわかる一冊となっています。

『椎尾弁匡先生と共生浄土教』

林靈法著 百華苑



毎年、一部の学生から「石碑について調べたい」と問い合わせがあります。名古屋キャンパス1号館の玄関横にある石碑のことですが、石碑に興味を持った時、或いはそんな課題が出た時にぜひ読んでいただきたいのがこの本です。学園史などにも石碑のことは出てきますが、建てられた由来だけでなく、刻まれた椎尾先生のお歌について、靈法先生が書かれたこの本を読んで考えてみてください。

また、この本は全七章からなっていますが、特に第七章は椎尾先生の思い出というだけでなく、靈法先生の人生の回顧録でもあり、かつ東海学園史ともなっており、短い文章の中に東海学園とそこでの教育に対する先生の想いがぎゅっと詰まっています。東海学園に係わるすべての人の必読の書かと思われます。

編集後記



この天白の地に東海学園女子短期大学ができて48年。この50年近い年月の間に靈法先生も亡くなられ、三好に大学ができ、女子短大も共学の大学となりました。学生はもちろんですが、教員も職員もさまざまに入れ替わり、先生のことを知る人も随分少なくなったように思います。かくいう私も、先生が亡くなる数年前に何度かお顔を拝見したことがあるだけです。

しかし私学である以上、建学の精神を忘れての発展はありえません。5学部体制となってスタートする今年、今一度、先生の教育にかけける思いに立ち返り、気持ちを新たにすべきだとの思いから今回の特集となりました。このような少ない紙面で伝えきれような内容ではありませんが、学内外の先生方の多大なご協力をいただきましてなんとか完成に漕ぎつけ、ほっとしています。この特集が、靈法先生と東海学園の歴史に、皆さんが興味を持って下さる一助となればと思います。【坪井】